
《Reality Cyber Space》

月草

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

《Reality Cyber Space》

【Nコード】

N3863BA

【作者名】

月草

【あらすじ】

一昨年のこと、ゲームを愛する者達にとって待ちに待った時が訪れた。VRを可能にしたオンライン用ゲーム機器『DREAM』バーチャルリアリティの発売。五感共有で仮想現実のゲーム内へのフルダイブ。それには様々な安全対策をクリアしてようやく成し遂げた成果だった。

その『はず』だったのだ。予期にもしなかった事態がプレイヤー達を襲う。『DREAM』発売から二年後の四月十日午前十時。この日は日曜日で、ゲーム好きならば朝でもたくさんのプレイヤーが『VRMMO』をプレイしていた。だが彼らはこの時をもってある

場所へと強制転送させられる。『Reality Cyber Space』と呼ばれる『ゲーム』の世界へ。そこは精巧に再現されすぎた『東京二十三区』だった。望月十伍もこの世界に飛ばされた一人のプレイヤーであった。彼はこの『Reality Cyber Space』の『凄さ』に見入ってしまう。こんなものを作れる者がいたのか、と。これは彼だけでなく全てのプレイヤーが抱いた感想であろう。しかし、そう思っていられるのは最初の一瞬だけだった。

プレイヤー達は思い知らされることになる——これがただの『ゲーム』ではないことを。

脱出方法は【Return Pointo】を最大値まで蓄積すること。感覚の現実化、ログアウト不可能、逃げ場ナシのサバイバルゲームが今始まる！

登場人物（前書き）

話が進み次第更新します。

登場人物

望月 十伍 もちづき じゅうご

本作の主人公。

白樺 紅葉 しらかは もみじ

十伍が最初に出会った少女。

竹之内 武蔵 たけのうち むさし

ギルド『不断の輪』のリーダー。

深沢 楓 ふかさわ かえで

ギルド『不断の輪』のメンバー。

堀江 紗綾 ほりえ さや

ギルド『不断の輪』のメンバー。

池永 晃輝 いけなが こうき

ギルド『不断の輪』のメンバー。

日向 千世 ひなた ちせ

ギルド『不断の輪』のメンバー。

椎名 凜夏 しいな りんか

ギルド『不断の輪』のメンバー。

？ハジマリノヒ【Game Start】（前書き）

長いプロローグです。四話あります。

? ハジマリノヒ【Game Start】

— 4 / 1 0 | 1 0 : 0 0 —

「——え？」

もちつきじゅうじ

望月十伍は目の前の光景に啞然としていた。

空へと高く伸びる建物がどこを見渡してもそびえ立っている。地上には多くの『人』が行きかっていた。彼はその雑踏の中で佇んでいる。

そしてしばらくして、はっとしたように『第一に出なければならぬ疑問』によりやく気付くことができた。

「ここ……どこだ？」

彼は先ほど暗闇の中にいた。何一つ無い真つ暗な闇の中。

そして突然の出来事の正体をうまく捉えられない十伍は、その正体を手繰り寄せるように、どうして俺はこんなところにいるんだ？と、ここに至るまで経緯を辿ろうとする。

（さっきの音声ガイダンス……）

それは暗闇の中で聞いた女性の声だった。

十五は思い出していく。

音声ガイダンスはこう言っていた。

「あなたは『Reality Cyber Space』の参加メンバーに選ばれました」

『Reality Cyber Space』とは？ 十伍の聞いたことのない単語。直訳すると『現実情報空間』となる。

「いやちよつと待てよ……」

もつと記憶を遡る。

暗闇の前には何があったか。自分はどこにいたのか。

「確か……俺は『MAO』をやっていたんじゃないのか？」

『MAO』とは数ある『VRMMORPG』の中の一つである。

『Middle Age Online』という正式名称の中世のヨーロッパを舞台としたゲームだ。

ここ数十年の間、全世界でバーチャルリアリティ技術（VR技術）の研究が進められていた。そしてバーチャルリアリティは今から八年前に実現した。

その研究とはまた別でゲームの進歩も着々と進んで来ていた。最初は電気などを用いなかったゲーム。それはやがて液晶画面の中で行われるようになり、その媒体はテレビ、携帯型、そしてオンライン。さらに画面の中にあつたものはカラーになり、『3D技術』の投入。

現在に至る進歩としては『VR技術』を取り入れたこと。

プレイヤーの五感全てをゲーム内で人工的に再現することを可能にした。だから彼らはあたかも本当にゲームの世界に入り込んだという快感を得ることができた。

実用化が難しかった『VR技術』は五年前に専用の施設に置かれ、そこでプレイすることから始まって、一昨年初めて市販向けVR機器『DREAM』が発売された。

値段は高価にも関わらず、その『新たな進化を遂げたゲーム』として『DREAM』は売れ、『VR技術』を取り入れたオンラインゲームも続々と進出してきた。

そして望月十伍もその『新たな進化を遂げたゲーム』のプレイヤーの一人であつた。

「『MAO』をやっていて……そしたら突然目の前が真っ暗になつて……」

十伍の言っていることは間違いない。

彼が『MAO』をやっていたのは事実だ。

もう一度周囲をよく見る。

街中を歩く大衆、天へと伸びる建物、街に緑を与える植物、建物

の間から見える青い空。

「まさか……」

どれも現実世界にある都会のものばかりだ。これらがある場所こそが彼の知っている風景であり、世界だ。

だが最初から何か違和感を抱かずにはいらなかった。

「ここは——ゲームの中なのか？」

十伍は自分の言ったことに自信が持てなかった。そのため疑問系になってしまう。

彼は試しに、先ほどから雑踏に立っている自分を綺麗にぶつからないように避けていく『人』にわざと触ってみた。

これで十伍は自分の持った意見の確証を得る。

「触れ……ない」

触れなかった。

いや、確実になにかに手がぶつかった感触は得られる。

しかしそれは人としての『肌の柔らかさ』や『骨の硬さ』といったものとは全く違う。彼の手はその歩く『人』の本体に触れたのではなく、その『人』の周囲にある『空気か何か』に触れたのだ。

感触はコンクリート壁のような固いものに似ている。透明な壁に阻まれる。そんな感じがもつとも近い状況だろう。

十伍は歩く人をもう一度しっかりと目を向けた。

「やっぱりこれ『人間』じゃない」

人の形はしているが、それは生命が宿っているわけではない。ただ十伍の周りを歩く『人』は背景となんら変わりの無いものでしかなかった。

「つまり、だ。ここがゲームの世界だとしたならば、この人たちは『NPC』ということか……」

十伍は自分の隣を歩き去る人をまじまじと見ていた。

もしこれが本当の人であつたならば、じろじろ見られているとい

う不快感を抱き、変な目で十伍を見ていただろう。

だが人《NPC》たちはそんなことをせず、十伍のほうなどまったく見ないでただ何事もなかったかのように過ぎ去っていくだけだ。
「あの、すみません」

十伍は試しに話しかけてみることにした。

手を人《NPC》の肩に向かって伸ばして、引きとめようとしたのだが。

「駄目か……」

手はその人《NPC》の肩に届くことはなく、話しかけても完全なるスルー。

華麗に人《NPC》は過ぎ去っていき、人混みの波に運ばれていつてしまった。

「話しかけれそうな気がしたんだけどなー」

人《NPC》はとてもよく作られている。今サービスを行っている『VRMMO』の中でもトップクラスのリアリティだ。

またそれに背景。建物や植物の再現度も足したとすると、他の『VRMMO』との比ではない。もはや現実にもっとも近い世界、と言っても過言ではないほどだった。

「これひよつとして夢じゃないだろうな？」

数々のゲームを転々としていた十伍だったが、これだけリアルに作られているものは初めて見る。彼が今までプレイした中でランキングを付けたとすると、総合順位においてもクオリティーは断然トップのものであった。

だからこそ、こんなものやっぱりは存在してなくて、これは自分がこういうゲームをしたいという願望が、夢として実現されたのでは？ と思って、十伍は自分の頬を思いきり引っ張った。

「痛っ！」

どうせ夢であろうと思ったから思いきり引っ張ったのが失敗した。じんじんと痛みが頬を伝う。

（ちよつと……これは痛い。というか、ここも相当なリアルじゃない

いか？)

現実世界とほとんど変わらない感触。

やっぱり現実？

だがそれは先ほど否定されたはずである。

「ゲームなんだよなー」

改めて辺りを見渡す。

ここまで精巧に作られていると感心してしまう。

「試しに歩いてみつか。ここがどこなのかもはっきりするだろうし」
十伍は雑踏の中でいつまでも立ち止まっているわけにもいかない
ので、とりあえず歩いてみることにした。

空を見るとまだ明るい。

「午前中かな？」

建物で太陽がどこにあるかはわからなかった。そのため太陽が真上に昇らない、十時か四時ぐらいだろうと、彼は思う。

道路には自動車が走っているし、店もいくつも建ち並んでいた。

「ん？ 入れないのか……」

人《NPC》たちが入っていくので十伍も中に入れると思ったのではないかと思ったのだが、

「入れません」

と、ウィンドウが出現してしまった。

だがこれでこの世界がゲームである実感が湧いてきた。

ウィンドウが店の入り口で出現するなど現実世界では絶対にあり得ない。

「そうだ！ 俺以外に誰かいないのか？！」

十伍は突然思い至ったように声をあげた。

さきほどから周りには人《NPC》ばかりで話し相手も一人もおらず、孤独を感じているところだった。

ここが夢で無いのだとしたら、自分と同じく他にもこの変なゲー

ムに迷い込んでしまった者がいるのではないか。

あり得ない話ではない。

逆にここに十伍一人だけがいる、まるで自分専用なという世界の
ほうがあり得ない。

「誰か別の本当の人を見つけられたら、ここが一体どこなのかわか
るかもしれないしな。よし！ 探しに行くか！」

と、その時だった。

突如、街中から警報が鳴り響いた。

警報は鋭く尖ったような音で、これから起こる『何か』がどのよ
うなものであるかを感じさせる。

「な、なんだ？！」

警報音は至るところから鳴っている。それは十伍のすぐ近くから
も。

十伍はその一番近くから鳴っているものを見た。

「こんなものが付いていたのか」

彼は今の今まで気付くことはなかった。

それは腕時計をつけているような感じ。

実際に時間の表示もされていた。

〔AM10:10〕

白を基調とした小型の時計機能の付いた謎の装置によると、現時
刻は午前十時十五分のようなのだ。

けれども表示されているのはそれだけではなかった。

「これってどういう意味だ？」

〔【RAID TIME】開始まであと 04:29〕

その表示によると何かをカウントダウンしている。数字はどんどん減っていく。

だが十伍にはよくわからない。彼は英語が得意なほうではなかった。そのため【RAID TIME】が一体何を意味する言葉なのかかわからない。

今も警報は鳴り続けている。

「えっ?!」

彼は腕に取り付けられた装置から目を離すと、状況が変化していることに気付かされる。

さっきまで街中を行き交っていた人《NPC》が建物の中へ走って入っていく。

走っている。

少し違う。

それにはなにかの意味が込められている。

ただ走っているわけではない。

これから起こる『何か』から避難している。

「ちよっ?! なんなんだ? 何が起こってんだ?!」

十伍は人《NPC》の動き方がさっきと打って変わってしまったがために自分はそうしようものかと混乱する。

「俺も逃げればいいのか?!」

彼は一目散に避難していく人《NPC》の後を追う。

建物の入り口は人《NPC》の山となっていた。狭い入り口へとたくさんのものが流れ込めばそれはもちろん詰まってしまう。

ぞろぞろと人《NPC》が入って行ってようやく十伍は建物の入り口までたどり着くことができた。

「だからなんでだよ?!」

彼は建物に入る前にまたあのウィンドウが、彼が建物の中に入るのを遮った。

「入れません」

端的に告げるそのウィンドウは十伍と人《NPC》の違いを決定づけるのだった。

仲間はずれにされた十伍。

彼はどれだけ入ろうとしても、透明な壁に阻まれたようでは入れない。

だが人《NPC》は何事もなく入っていく。

そしてカラカラという音を立ててシャッターが下りてきた。

「ちよつと待てよ！」

彼はシャッターを止めることもできず、入り口は閉ざされてしまった。

もう一度、腕にはめられた装置を見る。

【RAID TIME】開始まであと 00:03

すぐに最後の桁の数字はゼロになった。

次に新たな表示が現れる。

【RAID TIME】START

それはそのままの意味。この瞬間『何か』が始まるのだ。

「これから何が――」

そんなこと誰にも聞く必要はない。

聞くまでもなく彼は目にするのだから。

「な……ん……だ……」

『何か』は一箇所で起こることではなかった。街全体で『何か』が起こるのだ。

街の至る所で、黒や紫など、なにか恐ろしいものを予感させる無

数の光のエフェクトが放たれた。光のエフェクトは棘を生やした星型の多面体を形成している。

十伍はこの光景にあっけにとられていた。

だから表示が切り替わったことには気付かない。

〔RAID TIME〕終了まであと 30:00〕

『何か』はこの時始まる。これこそがこのサバイバルゲームの『始まりの時』だった。

光のエフェクトは収束していく。

だが代わりにそこに出現した『存在』がいた。

十伍から見えるところでも、光のエフェクトは十数個。遠くを見れば、果てしなくどこまであった。

それらが全て変化する。

現実世界にはいない。

ゲームの世界にしかないはずの。

モンスター
化け物に。

「どうなっただよ！」

ここはゲームの世界だと、十伍はわかっていた。

とても精巧に作られた都会の風景。

そこへモンスターが現れる。

もう何が現実で、何が非現実なのか。

わけのわからなくなる出来事だった。

「ってどうすりゃいいんだよ……」

十伍の周りに表れたモンスターは、一見すると現実世界の生き物に酷似している。だが明らかに人を殺しかねない、危険な爪や、毒をもったいそうな色をしている。

見た目で判断すれば。

犬、いや狼。

猿。

まだいる。

鳴き声をあげるモンスターが上空にもいた。

カラス。

他にも、何となく何を模して生み出されたモンスターかが想像がついた。

さっき声をあげたことで、そのモンスターたちが十伍のほうを見た。すると、ずるずると近づいてくるではないか。

ゲームでモンスターが出てくるなら、プレイヤーにはそれと拮抗できる力がなくてはならない。

それは剣や銃などの武器であり、はたまた人外の力、魔法であつたりする。

今それを十伍が持っているか？

彼の格好はただの洋服でしかなかった。さらには手ぶらだ。

一匹の狼に似たモンスターが十伍のほうに駆け出した。それは人間の走る速度より断然速い。

逃げることなどできない。そもそも足が竦んでいた。死。

ここはゲームだ。だがあまりのリアルさゆえの恐怖。

しかしそれは間違っていない。仕方の無いことだ。生物としての本能がそうしたとしてもおかしくはない。

この世界は『ゲーム』であつても、『現実^{リアル}』なのだから。

「くそっ——！」

十伍は飛びつかれそうになったところで腕を前にやり、自分を守ろうとした。

「ハアアアアッ！」

鋭い歯をむき出しにして、口を大きく開けた狼に襲われそうになった直前、十伍の前に一つの影が入り込んだ。

？シュウゲキ【Raid Time】（前書き）

プロローグ二話目です。

? シュウゲキ【Raid Time】

4 / 10 | 10 : 17

影によつて狼は顔から一刀両断されてしまった。

出現したときと同じように、今度は弱々しい光のエフェクトを放つて消滅する。この時、狼の上部に【Guttoney 暴食な狗Lv.2】と表記されていた。このモンスターの名称。さらにそのすぐ近くにあつた赤いバーが右から左へ短くなつていき、ついにはなくなつていた。

十伍は腕をどけて、【Guttoney 暴食な狗】を倒したその正体を見る。
美しい栗色の髪。

それは影が動くと共にたなびく。

「ちよつとアナタ、なにやってんの?! バカじゃないの?!」

影は十伍じゅうごのほうを振り向いた。

その正体は十伍と同じ年ぐらいの一人の少女だった。

整った顔立ち。眉を上げて詰め寄つてきた彼女の双眸は、十伍の顔を直視していた。

十伍のほうは、突然の出来事による恐怖、モンスターからの難を逃れた安堵、少女に詰め寄られたことによる戸惑い。

色んな感情やら、出来事やらで彼の頭はもう混乱の域を超えていた。

「アナタ! このッ……聞いてんのかっ?!」

十伍は正氣に戻る。

いきなり現れた彼女に剣を顔の真横で振り下ろされたからである。

剣が空気を切る音が耳のすぐ近くで聞こえた。

「おっ、おお、って誰だよ?」

「いいからさっさと剣を出せ!」

「剣？」

十伍が彼女の言う剣を出す前に、他の【暴食な狗】^{Gluttony}が襲い掛かってきた。

「チツ——」

少女はそれを察すると十伍と反対側を向いて【暴食な狗】^{Gluttony}に切りかかる。

一撃目だけでは【暴食な狗】^{Gluttony}は消滅しなかった。だが【暴食な狗】^{Gluttony}へとすぐさま次の斬撃が襲う。

二撃目。

さらに三撃目。

少女は三連続切りを十伍の前でイリユージョンのごとく見せ付けた。

剣は鞘が無いために切った後手に持ったままである。

「ってまだ剣出してないの?！」

また十伍のほうを見て驚いたようにそう言った。

「けっ、剣？」

「……まさかマニュアル見てないの？」

マニュアル。

はて、それはいかなるものか？ と十伍はそんな表情をしていた。「ちよつと、アナタもあの音声ガイダンスを聞いたんでしょ？ まあいいわ。私も意味不明な世界で意味不明なモンスターの相手しながら、いちいち一緒に操作説明するわけにもいかないわ。だから今から私の言う事にしたがって、その腕に引っ付いている白っぽい機械を操作してよ。余裕無いんだから、しっかり付いてきなさいよ。いい？」

「わ、わかった」

「まずその時計の横にあるスイッチを押す」

十伍は慌てて少女の言うとおりにスイッチを押した。

（こんなのついてたんだ）

押した後、ウィンドウが出現する。

他の『VRMMO』でもよくみるアイテムウィンドウだ。ホログラムで出現したそれはタッチパネル式になっていて、指で押したり、スライドさせたりすることで操作できる。

少女の言う事に従って操作していく。

まずアイテム、【武器】^{ウェポン}と表記されたところからたった一つだけ【剣】^{Sword}と書かれたアイテムがあり、それを選択して自分に装備させる。

「これか」

少女の持っている剣と同じものだった。ゲームの中で初期装備にされている何の装飾もされていない、刃と柄があるだけの剣。

（こんなのでこの人は戦っているのか）

彼女は十伍の前で、近寄ってくる敵を華麗な剣裁きで切り裂いていく。

十伍の予想では【剣】^{Sword}はおそらくこの世界で最弱の武器。

だがそれでも敵をなぎ払う彼女は、武器の力ではなく彼女自身の強さが反映しているということだ。そんな剣を慣れたように自身の体の一部のごとく扱っている彼女は大声で十伍に指示を出し続ける。次はスキルウィンドウ。

指示に従っていくと【PSI】^{サイ}と書かれたウィンドウにたどり着く。

いちいちどんなものを説明文を読んでいる暇は無い。

今も少女が孤軍奮闘しているというのだから、今すぐにでも加勢したかった。

選んだのは【強化】^{Boost}というスキル。

これもどういうスキルなのかもさっぱりわからないまま、説明文も読まずに発動させる。

「なにこれ?!」

スキル発動後、十伍の体を白い光が膜のように包んだ。

「それでアナタは肉体強化された状態になった! だから攻撃をくらっても少しの痛みで済むようになる!」

彼女は十伍に出した指示を全てこなしたことを横目で確認する。

十伍はさきほどどこに変化があるのかはわからない。

少女が言うことには、痛みが和らぐ。

（痛みが和らぐ？）

『VRMMO』は『VR機器』の性質を最大限に利用するために、見せるだけでなく感じさせることにも重点を置いた。脳へとゲームの中で起こった様々な感触を、電気信号として脳に送り込むことで、あたかも実際に自分がそこで本当に触ったという感覚を得ることができる。

『痛み』も例外ではないが、それはあくまでもちよつとした感触にすぎない。法律で既に規定値を設定されており、『DREAM』の使用上の安全を確保している。

変なことを言う少女だが、戦闘準備を整えた十伍もすぐに加勢する。

少女に背後から襲いかかろうとしていた猿モドキ——【激昂^{Wrath}する申th】に剣を突き刺す。

（一撃じゃ倒せないのかっ！）

そうすぐに察知した十伍は剣を慌てて【激昂^{Wrath}する申th】から抜いた。他のゲームに比べて刺した感覚がリアルだった。

だがそんなことを気にしている場合じゃない。

今も【激昂^{Wrath}する申th】の反撃は始まっていた。

横殴りの攻撃が十伍に当たる。

「ぐっ……」

二撃目を猿に食らわす。

【激昂^{Wrath}する申th】の上部にバーが表示されている。

（まだ半分かよ！）

合計四回で猿はようやく光を放って消滅した。

その後も少女と共に近寄ってくるモンスターを倒していった。だがいくら倒してもどこからやってくるのか別の場所から新たにやってくる。

「はあはあ……」

「気付いた？」

十伍と背中合わせになった少女は周囲をうろろしている敵に警戒しながら、話しかける。

「何が？」

「それ本気？ それだけ疲れたようならわかって当然だと思うけどさ。このゲームって――」

少女は馬鹿馬鹿しいようなことを何のためらいもなく告げる。それが本当ならばこれが、このゲームが、この世界が、一大事なものとなってしまふ。

「――デスゲームじゃない？」

十伍は「は？」と当然のような反応をした。

だが少女は真剣の声色で話し続ける。この事態の深刻さを十伍に知らせるために。

「アナタはマニュアル読んでなかったのよね？」

「ああ、そんなの知らねー」

「じゃあ、アナタはこのゲームからやってきたの？」

これこそ変な質問だろう。

まるで外国人に対して「どこの国からやってきたの？」と聞いているような質問。オンラインゲームにおいて出身地を訊くならまだわかるが、どこのゲームから来たのかという質問自体が矛盾している。

なぜならどこのゲームと訊かれたら、答えなど最初からなく、無理やり答えるとしたら「ここ」としか答えようがないからだ。

「『Middle Age Online』だけど」

「私は『Kingdom Match Online』よ。アナタもここに飛ばされて来たんでしょ？」

それでも答えることができた。だからこそこれが異常な事態なの

だ。

彼女も十伍とまったく同じだった。

他のゲームをしていたはずなのに、いきなりこの世界に飛ばされてきていた。

「ゴメン、どうやらまだ話すには余裕ないっぽいわ」

「そうだな」

モンスターは待ってくれと言っても通じる相手ではない。ただの獣。

十伍と少女は【剣】^{Sword}を振りかざして、獣たちに立ち向かっていく。

？シュウゲキ【Raid Time】（後書き）

この作品では時間表示が多く存在します。それによって緊張感、緊迫感、など感じていただければ……。読者の方々が何かしらを感じてくださることを祈ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3863ba/>

《Reality Cyber Space》

2012年1月14日18時46分発行